

【6月の気象】

6月は梅雨の時期となり、愛媛県では年間で最も降水量が多い月です。梅雨前線に向かって南から暖かく湿った空気が流れ込むと、前線の活動が活発化して大雨となり、災害をもたらす場合があります。四国地方における梅雨入りの平年値は、6月5日ごろです。

前線が長期間停滞すると低温や日照不足で農作物に被害が発生することがあります。

梅雨前線の活動が弱く空梅雨になると、盛夏期に水不足となる懸念があります。

6月に台風が接近することもあります。6月に四国地方へ接近する台風の数、平年値で0.3個です。

これは、おおよそ3年に1回は台風が接近することを意味しています。

これから気温が高い時期を迎えます。気象台では、当日または翌日の最高気温が35以上になることが予想される場合は「高温注意情報」を発表し、熱中症への注意を呼びかけます。

高温注意情報の発表状況はこちらです <https://www.data.jma.go.jp/fcd/yoho/data/kouon/>

農業に影響するこの時期の気象と天候

現象の種類	状況や要因	注意すべき事項	着目してほしい情報
大雨	梅雨前線	農業施設の管理	天気予報、気象情報 大雨に関する警報・注意報等
高温	暖気流入と日照	農作物の管理 健康管理	天気予報 高温注意情報
少雨 長雨 日照不足 長期の低温 長期の高温	平年から大きくかけ離れた気象状況が数日間かそれ以上の長期間持続	農作物の管理 健康管理	各現象に対する気象情報 低温または高温に関する異常天候早期警戒情報

気象情報は松山地方気象台ホームページからの入手が便利です

<https://www.jma-net.go.jp/matsuyama/>

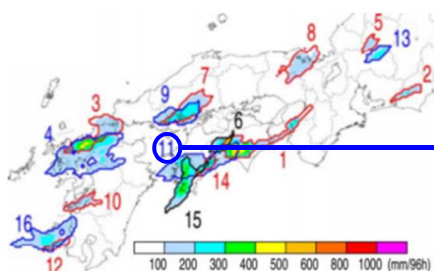
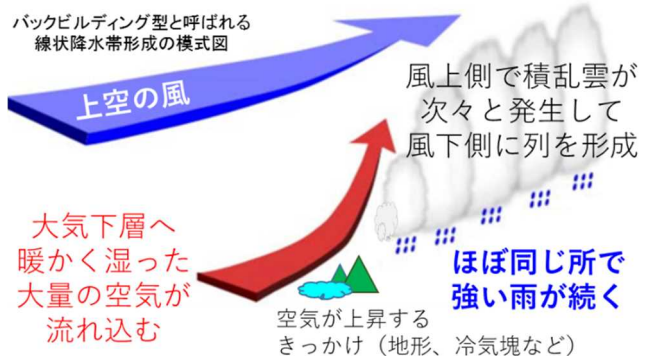
6月中旬に「早期天候情報」へ移行予定

【気象用語】「線状降水帯」とは

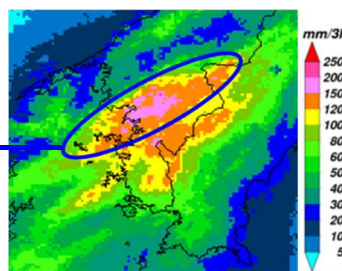
集中豪雨の際、気象レーダー画像にしばしば線状の降水域が現れ、それが同じ場所に留まり大雨災害をもたらすことがあります。これは「線状降水帯」と呼ばれ、最近では一般にも広く知られています。線状降水帯の定義やこれを判別する条件は定まっていますが、ある気象研究者によると「20~50kmの幅で50~200kmの長さとなり、数時間ほぼ同じ場所にとどまるもの」とされています。

線状降水帯の実態は、複数の積乱雲による降水帯が線状に並んだもので、発生要因として下記が考えられています。

- 暖かく湿った空気が地上付近の大気下層へ継続して大量に流れ込む。
- 地形や冷たい空気の塊など空気を上昇させるきっかけが存在する。
- 上空に冷たい空気が入るなどして対流が活発となり積乱雲がしやすい。
- 積乱雲の列を形成しやすい上空の風がある。



2018年7月5日00時~7月9日00時に発生した線状降水帯16事例と降水域内における積算降水量



2018年7月7日08時までの解析雨量3時間積算値

気象研究所によると、平成30年7月豪雨の際、西日本を中心に16事例の線状降水帯が発生したとされています。左の図に示す解析雨量は、そのうち7月7日の明け方から昼頃にかけて、愛媛県の南予に大雨をもたらした線状降水帯によるものです。